



Nagoya Philharmonic Orchestra

名古屋フィルハーモニー交響楽団 2020-21 SEASON

第481回定期演奏会
7月10日(金)・11日(土)

7
2020 July



プログラム Program

第481回定期演奏会

〈「生誕250年記念 トリビュート・トゥ・ベートーヴェン」シリーズ／田園〉

The 481th Subscription Concert "Tribute to BEETHOVEN Series"

2020年7月10日(金)18:45／11日(土)16:00

愛知県芸術劇場 コンサートホール

6:45pm, Friday July 10 / 4:00pm, Saturday July 11, 2020 at Aichi Prefectural Art Theater Concert Hall

指揮:小泉和裕〈名フィル音楽監督〉

Kazuhiko KOIZUMI, Conductor / Music Director

コンサートマスター:後藤龍伸〈名フィル コンサートマスター〉

Tatsunobu GOTO, Concertmaster

ベートーヴェン:交響曲第6番へ長調 作品68『田園』

(約43分)

Ludwig van Beethoven(1770-1827): Symphony No.6 in F major, Op.68 "Pastoral"

第1楽章 田舎についた時の楽しい感覚の目覚め:アレグロ・マ・ノン・トロッポ
Erwachen heiterer Empfindungen bei der Ankunft auf dem Lande: Allegro ma non troppo

第2楽章 小川のほとりの情景:アンダンテ・モルト・モート
Szene am Bach: Andante molto moto

第3楽章 田舎の人々の楽しい集い:アレグロ
Lustiges Zusammensein der Landleute: Allegro

第4楽章 雷鳴、嵐:アレグロ
Gewitter, Sturm: Allegro

第5楽章 牧歌、嵐の後の喜ばしい神への感謝の気持ち:アレグレット
Hirtengesang. Frohe und dankbare Gefühle nach dem Sturm: Allegretto

※本公演に休憩はございません

主 催：公益財団法人名古屋フィルハーモニー交響楽団

後 援：愛知県・愛知県教育委員会・名古屋市・名古屋市教育委員会・公益財団法人名古屋市文化振興事業団・
中日新聞社・CBCテレビ

助 成：
 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会

公益財団法人アフィニス文化財団  Affinis ETIQUETTE

プロフィール Biography



小泉和裕 (指揮／名フィル音楽監督)
Kazuhiro KOIZUMI, Conductor / Music Director

2016年4月、名フィル音楽監督に就任。

1969年東京芸術大学指揮科に入学、山田一雄氏に師事。1970年第2回民音指揮者コンクール第1位受賞。

1972年7月、新日本フィル創立に際し、指揮者として参加。同年ベルリンのホッホシューレに入学し、ラーベンシュタイン教授にオペラ指揮法を師事。

1973年、第3回カラヤン国際指揮者コンクールに第1位入賞。その後ベルリン・フィルを指揮してベルリン・デビューを飾った。

1975年～1979年、新日本フィル音楽監督を務める傍ら、1975年ベルリン・フィル定期演奏会に登場、1976年フランス国立放送管を指揮しルービンシュタイン、ロストロポーヴィチとも協演、同年ザルツブルク音楽祭でウィーン・フィルを指揮、その後もミュンヘン・フィル、バイエルン放送響等、ヨーロッパ各地において精力的な指揮活動を行った。また、アメリカにおいても、1978年ラヴィニア音楽祭でシカゴ響を指揮し大成功を収めた後、1980年シカゴ響定期公演に登場し注目を集めた。その他、ボストン響、デトロイト響、シンシナティ響、トロント響、モントリオール響などにも客演。

1983年～1989年カナダのウィニペグ響の音楽監督、1986年～1989年都響の指揮者を歴任。ロンドンのロイヤル・フィルには1988年より定期的に招かれ、数々の名演を残すとともにチャイコフスキーの交響曲第4、5、6番のディスクを完成させた。

1989年～1996年九響首席指揮者、1992年～1995年大阪センチュリー響首席客演指揮者、1995年～1998年都響首席指揮者、1998年～2008年都響首席客演指揮者、2003年～2008年大阪センチュリー響首席指揮者、2008年～2013年都響レジデント・コンダクターおよび日本センチュリー響音楽監督、2006年～2018年仙台フィル首席客演指揮者を歴任。

現在名フィル音楽監督のほかに、都響終身名誉指揮者、九響音楽監督、神奈川フィル特別客演指揮者を務める。

ベートーヴェン

交響曲第6番へ長調 作品68『田園』

交響曲第6番『田園』(パストラール)は、『運命』の愛称の付いた交響曲第5番と共に1807年から作曲され始めた。当時使っていた「田園交響曲スケッチ帳」等から推測すると、1807年はほぼ『運命』に没頭し、それが完成した同年暮れ頃から『田園』に集中し、1808年初秋に『田園』は完成された。そして2つの交響曲は、1808年12月22日にアン・デア・ヴィーン劇場で、ベートーヴェン主催の「大演奏会」で、前半のピアノ協奏曲第4番とともに初演された。

古典派のベートーヴェンが作品の中に標題をついているのは、全く珍しいことである。同様な標題交響曲として、J.H.クネヒトの大交響曲『自然の音楽描写』(1784)がベートーヴェンの創作に刺激を与えたことは推察できる。標題に類似点もある。しかしひべートーヴェンの『田園』は、この曲やロマン派の交響詩のような描写音楽ではなく、ベートーヴェン自身が「絵画描写よりも感情の表出」と初演パート譜に書き込んだように、あくまで古典的な「性格交響曲」である。

この交響曲は、同時に作られた『運命』交響曲と全く対照的な外観をもっているが、子細に観察するといくつかの共通点が浮かび上がってくる。例えば第1楽章の主題がモットーのように反復されて、楽章全体が極めて緊密に構成されている(『田園』ではの音型)。また5楽章という古典交響曲の枠を超えた構成も、『運命』との比較から類推して考察できる。『運命』では終楽章の前に比較的長い間奏があり、それが作品全体の構造と表現の重大な鍵を握っている。『田園』ではその間奏をさらに拡大して、1つの楽章に相当するほどの巨大な「序奏」となったとも考えられるのである。

《運命》 第3楽章－間 奏－第4楽章

《田園》 第3楽章－第4楽章－第5楽章

一方『田園』で全く独特なのは、調性の構造である。第1楽章はソナタ形式としては珍しく和声的緊張が少なく、作品全体でも安らかな下属調を強調する傾向がみられる。ベートーヴェンが愛用した減七和音も激しい転調も「嵐」までは一切使われない。トロンボーンもピッコロもティンパニも「嵐」まではとておく。従って「嵐」は終曲への序奏の性格をもつと同時に、作品全体の展開部的な役割をもち、

表現意図は明快であるが、作品構造上は両義的な性格をもっているといえよう。こうした構造上の特性をはるかに超えて、この曲の表現上の美質は、ベートーヴェンの全作品の中でも際立った魅力となっている。とりわけ第2楽章のしみじみとした美しさ、第1楽章コーダや嵐の後半から終曲にかけての圧倒的な高揚、終曲の敬虔な祈りなどは、聴き手の心に深い感動を呼び起こすであろう。これはまさにベートーヴェンの熱き「自然讃歌」に他ならない。

第1楽章 田舎についた時の楽しい感覚の目覚め

ソナタ形式。ヘ長調という調性も第1主題のバスのドローンも、伝統的に「田園曲」で多用されている。

第2楽章 小川のほとりの情景

ソナタ形式。チェロのトップの2人が弱音器をつけて独自に動くさまは見ていても楽しい。コーダで木管楽器ソロによる3種類の鳥の鳴き声の模倣(ナイチンゲール、ウズラ、カッコウ)がある。

第3楽章 田舎の人々の楽しい集い

3/4拍子で二分形式のスケルツォ主部と2/4拍子のトリオ。次の楽章にアタッカで続くコーダがつく。

第4楽章 雷鳴、嵐

チェロの5連符とコントラバスの4連符が同時に鳴るバスは、20世紀を予見するトーンクラスターであり、恐ろしい効果を発揮する。

第5楽章 牧歌、嵐の後の喜ばしい神への感謝の気持ち

ロンド形式。通常のロンドABACABの後に付いたコーダの大きな楽段とその変奏反復は、ロンド主題の展開であると同時に拡大されたコーダであり、自然への感謝の気持ちを大いに高める。

作曲=1807-08年

初演=1808年12月22日 ウィーン、アン・デア・ウィーン劇場(作曲者自身の指揮)

楽器編成=ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、ティンパニ、弦楽5部(第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス)